

第一章

子は鏡

子は親の鏡

ウリのつるにナスビはならぬ

「蛙の子は蛙」とか「ウリのつるにナスビはならぬ」などのことわざがある。血統は争えぬ、というたとえに用いられる。

どう望んだところで、蛙の子は蛙だし、ウリのつるにはウリ、ナスビの枝にはナスビしかない。そのナスビにも、できのよしあしがある。できばえは、それぞれに原因あつての結果であり、偶然にそうなっているわけではない。種子、土壌、肥料、日照、水分、手入れなど、いろいろな要素がナスビのできを左右する。できがわるければ、農家の人は、種子がよくなかったのか、水が足りなかったのかわるか、肥料は適量であつたらうかと、反省して原因をつきとめ、来年の作に意欲を燃やす。懸命に手入れをしたのに、できがわるいのはけしからんと、ナスビに腹をたてる人はいない。

子どもについても、同じことが言えると思う。親として、できのよい子になつて

ほしいと願わぬ人はないはずだが、そうなるかならぬかは、子ども自身の責任ではない。

両親の健康状態や性格、夫婦の心の通い方、妊娠中の母親の生活態度、生まれてからの育て方やしつけなどが、子どものすべてに微妙に影響する。

くわしくは、おいおいに述べるが、子どもの姿は、ほとんどの場合、両親の心や行いが反映しているのだと言ってよいであろう。つまり、子どもは親を映す鏡なのである。

したがって、子が親の思うとおりにならないからといって、子どもに腹をたてたりするのは筋違いであろう。できのわるいナスビに腹をたてるようなものだ。

原因はあくまでも自分たち親の側にあるものと考えて、反省すべきは反省し、改めるべきは改め、その上でしつけをし教育するというのが、本当の育て方ではないであろうか。

もつとも「子は鏡」ということは、なにも親の欠点だけを映すということではない。美点や長所をも映してくれる。しかしそれは親にとって困ることではないので、深く触れる必要はあるまい。

子どもによいところがあつたら、謙虚に感謝するようでありたい。「私がそうだから」などと、自慢めいた気持ちを持たないことが大切だと思う。

何事でもそうだが、自慢すると、そこで進歩は止まるものである。まだ足りない、もっと上があると、自分をむなくし、謙虚な気持ちを持ちつづけなければ、それより以上の進歩は望めないということを、知っておきたい。

問題となるのは、子どもの言動で困るときである。いきおい本書では、子どもで困る場合を、多く取りあげることになる。

似た親子、似ない親子

二組の夫婦が、小学校へ入った男の子を連れて、あいさつに来たことがあつた。まあ少し話していきなさいと、おやつどきでもあつたし、到来もののセンベイを出してもてなした。

一人の子は、ピヨコンと頭を下げると、さっそくセンベイを取りあげて、バリバリ食べだした。その食べ方は伸び伸びとして、ほほえましい。

もう一人の子は、母親の顔を見上げた。へいただいてもいいの？というふうである。

母親が、

「ちようだいしなさい」

と言うと、うなずいてセンベイを手にし、端のほうから少しずつ折って、口に入
れはじめた。子どもながらに、折り目正しい。

私は、子どもたちの様子を見て、思った。

〈なるほど、親によく似ている〉

前の子の父親は、太っ腹で豪放な男である。奥さんもまた、こだわりのない性格。
後の子の両親は、そろって実直で、几帳面である。家庭でのしつけも、きちんと
していることであろう。

子どもの姿を見れば、親の性格も、家庭のありようも、うかがい知ることができ
ようというものである。

とは言っても、この親子のように、誰が見てもよく似ていると思えるような場合
ばかりとはかぎらない。

親が温厚篤実おんこうとくじつなのに、子どもがカンシヤク持ちだということもある。

同じ父母から生まれた実のきょうだいなのに、性格ががらりと違っていることもある。

両親はそれほど頭がよいとも思われないのに、子どもが秀才で、トビがタカを生んだようだと言われたりもする。

「子は親の鏡」と言っても、現在の親の姿をガラスの鏡に映したようなもの、という意味ばかりではない。

子どもが、親に似ないでカンシヤク持ちであるのも、あるいは秀才であるのも、両親の過去から現在までの精神生活の要因が、複雑にからみあつての結果である。その意味で、鏡であることにまちがいはない。

親たちの思い方、育て方ひとつで、子どもをどのようにでも育てることができる。鏡だからである。

逆説めいた言い方になるが、親に似ない——自分たちより以上にすぐれた子どもに、育てることもできる。

そこを思えば、子どもを育てるといふことは、このうえなく楽しいことではなか

ろうか。

子どもがわるいのは友だちのせいか

ある母親と、若いPL教師との間に、こんな対話があった。

「長男のS男が、最近とてもわるくなりました」

「どうしてそうなったか、思い当たることはありませんか」

「わるい友だちと遊ぶようになってからです。その子の父親というのは、近所のき
らわれ者で、仕事もしないで一日中酒ばかり飲んでいます。それに母親も常識がな
くて……」

「ちょっと待ってください。S男君がわるくなったのは友だちのせい、友だちが
わるいのはその親のせいだとおっしゃるのですね」

「ええ、まあ」

「それは考え方がおかしいではありませんか。友だちがわるいのが親の責任なら、
S男君がわるくなったのも、親であるあなたの責任ということになると思います

が」

「そんなことはありません。その子と遊ぶまでは、S男はとて面白い子だったんですから！」

母親は、おこつて帰ってしまったという。

その教師から報告を受け、若さのあまり純理をたて、母親の気持ちを解きほぐすことをしなかった点をたしなめた。

しかしながら、友だちのわるいのはその親のせい、わが子がわるくなったのは友だちのせいというのでは、ロジックが合わないし、やはり反省が足りないのではなからうか。

事情や動機はいろいろあるであろうが、わが子の言動は、つまるところ親である自分の鏡なのだということを入れて、育児にあたりたいものだと思う。

ひと口に「子は鏡」といっても、その映り方は単純ではない。

父親の消極的な態度がそっくり表れている場合もあれば、母親の妊娠中の偏食が原因で、子どもが食べ物の好ききらいをするという場合もある。

両親の夫婦仲を映していることもある。

両親だけではない。祖父母の心を映すこともあれば、子守りをしている人の気持ちを反映する場合もある。

また、親が夫婦げんかをしたから子どもが必ずきょうだいげんかをするとか、親が腹をたてたから子どもがすぐ腹をたてる、というものでもない。親と同じ形で表れることもあれば、そうでないこともある。

さらには——一般には信じがたいことかもしれないが——両親の幼いころや、先祖の人の鏡であることもある。

表れ方は千姿万態で、まことに複雑である。そのような子どもの姿を、どのように理解し、親としてどう反省すればよいのであるかということ、そしてまたどう改めれば、子どもは望むようなよい子に育ってくれるであろうかということ、多くの実例を挙げながら、順を追って述べてみたい。

現在の鏡

母の鏡

子どもで困ることがある場合、まず親の現在の心を反映しているのではなからうか、と考えてみたい。父かもしれない。母かもしれない。あるいは夫婦仲かもしれない。

乳児が、乳房にすがりながら、飲んだり飲まなかったり、ということがある。飲みそうもないので乳首を離そうとすると、怒って泣きだし、また乳房にかじりつく。こんなときは「困った子だ」などと思わないで、母親自身の気持ちをふりかえってみたい。きつと平静ではないと思う。何か気にかかることがあって、いらいらしているかもしれない。

そう気がついたら、

「今は乳を飲ませるといふ仕事をしているのだから、よそごとに気を散らすのはやめよう。さあ赤ちゃん、ゆっくりお飲みなさい」